

阪神淡路大震災を語る

1.17 私たちは忘れない—医師たちのあの日の証言

日本の災害医療の原点と言われる阪神淡路大震災(平成7年発災)から23年が立ち、多くの若者にとって生まれる前の出来事となりました。その大震災で、自ら被災しながらも、現場で働いた医師たちにとっても、遠い過去のこととなりつつあります。この度、その医師たちが登壇し、あの日、何があったのかを語りまします。DMATやJMAT, JRATがなぜ必要とされ、設立されたのか。故きを温ねて新しきを知る、そして未来へ繋ぐ。そのような機会を設けました。職種や年齢は関係なく、是非ご来場ください。

.....

日時：平成30年1月14日(日) 午後13時から17時まで (12時30分より受付)

場所：新大阪コロナホテル : <http://osakacoronahotel.co.jp/access.html>

主催：大阪府大規模災害リハビリテーション支援研究会

協力：大阪医科大学リハビリテーション医学教室、大阪 JRAT

助成：JR西日本あんしん社会財団

参加費：500円

参加資格：特になし。定員(90名)になり次第、締め切らせていただきます。

.....

水谷 和郎 (当時 兵庫県立淡路病院) (現 神戸百年記念病院 心リハセンター長)



当直室で目が覚め、時間を確認したのが5時30分。それから突然の轟音と大きな揺れ。野戦病院のような状況。その救急外来の混乱状況を留めるビデオ。23年前にすでに『トリアージ』という言葉を用いていた事実。震災当日、兵庫県立淡路病院で何があって、何ができて、何ができなかったのかを、第三者ではない当事者が、当時の救急外来の映像を供覧しながら解説する。

富岡 正雄 (当時 芦屋市 伊藤病院) (現 大阪医科大学救急医学教室 准教授)



1月16日から17日にかけて、芦屋駅前の小さな病院で宿直をしていた。ベッドで仮眠をとっていたとき、地震が発生。幸い院内は負傷者なし。しかしその後、次々と重傷者が運び込まれ……。近所に住んでいる大阪市大の外科医が飛び込んできて、手伝ってくれた。2人で暗闇の中、無我夢中で働いた。数時間後患者さんから聞いた。阪神高速道路が倒れてる……？

高島 典宏 (当時 東神戸病院) (現 東神戸病院 内科科長)



1月17日、全壊した自宅マンションから近くの駐車場へと家族を連れ出し、寝間着のまま病院に向かった。当日の記録によると、死亡確認72件、内臓損傷6件、血気胸6件、挫滅症候群7件とあった。また外傷が中心だった障害像が、比較的早期に肺炎、心不全、精神疾患、そして消化管出血、脳血管障害へと変化していき、被災地の真ん中で、実態はさらに深刻となった。

佐浦 隆一

(当時 神戸大学病院) (現 大阪医科大学リハビリテーション医学教室 教授)



不思議なことに、地震の直前に次女(生後6ヶ月)が大泣きし、家内がベビーベッドから移した後に衣装ダンスが倒れ込み、次女は九死に一生を得た。自転車で病院に行ったが、クラッシュ症候群、深部静脈血栓症、震災関連死など全く知らず、そのために多くの命が失われたことを思うと、今でも胸が痛む。そして、JRAT活動にできるだけ関わることが、せめてもの償いと思う。

鶴飼 卓

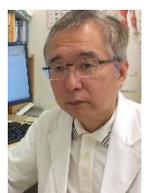
(当時 大阪市立急性期総合医療センター) (現 兵庫県災害医療センター 顧問)



発災当日「大阪まで車で走っている時間の余裕はない、近くの病院で働こう」と、県立西宮病院に飛び込んだ。次から次に負傷者が運ばれて、大混雑のロビーでは心肺蘇生も行われた。18日午後大阪市立総合医療センターに辿り着き、院長や同僚に惨状を報告し、その日の夜に緊急ミーティングを行った。そして他の医療機関とも協力して、オール大阪で被災地支援をすることとした。

長野 正憲

(当時 神戸市 灘金沢病院) (現 長野整形外科医院 院長)



公衆電話しか通じない200床ほどの病院の廊下に、患者があふれかえり途方にくれていた。それが大阪市立急性期総合医療センターの鶴飼先生に伝わり、患者さんを受け入れてくださるとの事を、隣にあった神戸市消防局灘消防署職員からのメモ書きで知った。その結果、多方面の連携により、1月19日早朝、ヘリコプターでクラッシュ症候群など8名を搬送することが出来た。

中山 伸一

(当時 神戸大学病院) (現 兵庫県災害医療センター センター長)



当時勤務していた神戸大学病院救急部に夕方やっとたどり着いた私は、全科の協力を得ながら、3日後に疲労で倒れるまで、不眠不休で診療に当たった。今から思えば、普段から災害時の医療について少しでも勉強しておれば、救えた命が確実にあった。その失われた命に報いるため、この23年間、災害医療体制充実への努力を続け、そしてこれからも続けるつもりである。

.....
特別企画 パレスチナにおける災害リハビリテーションの支援活動紹介

田中 好子 特定非営利活動法人 パレスチナ子どものキャンペーン CCP Japan 事務局長



私たちは、2014年のガザ戦争時に空爆などで負傷し障がいを負った子どもたちに、現地の医師および作業療法士による訪問リハビリテーションを支援しています。これまで750人以上に対して、週2回から2週に1回程度のリハビリテーションを行うことにより、約半数の方の症状が緩和し、社会復帰をすることができました。この現地の状況と経験を紹介いたします。

.....
参加申し込み・問い合わせ；以下メール（もしくはQRコード）をお願いします。

saigareh.leader2014@gmail.com



大阪府大規模災害リハビリテーション支援研究会 富岡

大阪医科大学リハビリテーション医学教室内 (072-683-1221 (代))

<https://saigarehleader201.wixsite.com/saigareha>